

令和四年度

第一学年 前期期末テスト

令和四年九月九日（金）実施

【教科書から】
・30～33 ページ「グループ
ディスカッション」
・64～73 ページ「空中ブラ
ンコ乗りのキキ」
・78～81 ページ「字のない
葉書」

I 国 語

- 1 はじめのチャイムが鳴ったら冊子を開き、ページを確認して問題を解き始めてください。
- 2 わからない問題にこだわらず、できる問題から解きましょう。
- 3 解答は、解答欄に丁寧に記入してください。
- 4 指示がなくても漢字で答えるようにしましょう。
- 5 解答用紙にマス目がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れましょう。
- 6 問題文を最後までよく読み、答え方に気を付けて解答しましょう。
- 7 終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに鉛筆を置いてください。

一年	組	番	氏名

〔二〕次の問いに答えなさい。(15)

問一 次の傍線部の漢字の読みを、ひらがなで答えなさい。【知各1】

- ①寂しい気持ち。 ②先人に追隨する。 ③植物の茎と根。 ④甲種と乙種の分類。
- ⑤会議が円滑に進む。 ⑥滑るように走る。 ⑦煩雑な作業。

問二 次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、送り仮名が必要なものは書きなさい。【知各1】

- ①ヒキンな例を挙げる。 ②サバクにすむ生物。 ③カンソウした大地。 ④リンリ学を学ぶ。
- ⑤失敗をチンシヤする。 ⑥成功をイノル。 ⑦ハツカン作用がある。 ⑧賞金をカケタレース。

〔三〕次の問いに答えなさい。(20)

問一 次の文章について、①段落の数、②文の数をそれぞれ数字で答えなさい。【知各1】

日本は、小さな島国です。しかも、人々が生活できるような平らな土地は、それほど多くはありません。

それでも、その限られた土地には一億人を越える人々が住み、さまざまな暮らしを営んでいます。

その一つが山村です。人々はここで、大昔から木を切ったり、炭を焼いたりしてきました。そしてさらに、小さな畑を作ったり、魚を取ったりして、生活を支えてきたのです。

問二 次の文に「／」を入れて文節に区切りなさい。ただし、「／」は解答题紙に書き入れなさい。

【知各2】

- ① 窓の外にはかわいい小鳥がいる。
- ② 牧場では牛やヒツジが遊んでいる。
- ③ 昼食を十二時から食べはじめる。

問三 次の文中の、主語と述語の文節をそれぞれ答えなさい。ただし、主語が省略されている場合は解答题に「なし」と答えなさい。【知各2】

- ① わたしもこの小説をすぐに読みたい。
- ② 友達と海に行きたい。
- ③ いつまでも君は僕の一番の友だちだ。

問四 次の文中の傍線部は修飾語である。その被修飾語となる文節をそれぞれ抜き出さなさい。【知各2】

- ① 庭に美しい花が咲いた。
- ② 京都に血がつながった姉がいる。
- ③ 早く国語の宿題を終わらせて、テレビを見よう。

〔三〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(30)

そのサーカスでいちばん人気があつたのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

サーカスの、大テントの見上げるように高い所を、こちらのブランコからあちらのブランコへ、三回宙返りをしながらキキが飛ぶと、テントにぎっしりいっぱい観客は、いつも割れるような拍手をします。
「まるで、鳥みたいじゃないか。」

「いえ、どちらかというと、ひょうですね。」

「いや、お魚さ。あゆはちょうどあんなふう跳到るよ。」

人々はみんな、キキの三回宙返りを見るために、そのサーカスにやってきました。どの町へ行っても、キキの評判を知っていて、だからそのサーカスは、いつでも大入り満員でした。

「なあ、キキ……。」

団長さんは、いつも言っていました。

「おまえさんは、世界一のブランコ乗りさ。だってどこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできないんだからね。」

「でも、団長さん。いつか、誰かがやりますよ。みんな、一生懸命、練習をしていますもの。そうしたら、私の人気は落ちてしまうでしょう。」

「心配しなくてもいい。誰にも三回宙返りなんてできやしないさ。それに、①もし、誰かがやり始めたら、おまえさんは四回宙返りをしてみせればいいじゃないか。」

「四回宙返り？　できませんよ。練習してみましたが、三回半がやっとなんです。本当に、鳥でもない限り四回宙返りなんて無理なんです。」

キキは、人々の評判の中で、いつも幸福でしたが、誰か他の人が三回宙返りを始めたらと、考えると、そのときだけ②少し心配になるのです。

「そのときは、団長さんの言うとおり、四回宙返りをしなければいけないのだろうか……。」

*

キキは、サーカスの休みの日、誰もいないテントの中で何度か練習をしました。でも、いつももう少しというところで、ブランコに届かずに落ちてしまうのです。練習のときには、落ちたときの用心に、下に網が張ってありますが、本番のときには、それがありません。キキのお父さんも、空中ブランコのスターだったのですが、三回宙返りに失敗して落ち、それがもとで亡くなったのです。

「およしよ。」

練習を見に来たピエロの口が、キキに言いました。

「四回宙返りなんて無理さ。人間にできることじゃないよ。」

「でも、誰かが、三回宙返りを始めたら、③私の人気は落ちてしまうよ。」

「いいじゃないか。人気なんて落ちたって死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いっそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」

「人氣が落ちるということは、きつと寂しいことだと思うよ。お客さんに拍手してもらえないくらいなら、私は死んだほうがいい……。」

キキのいるサーカスが、ある港町のカーニバルにやってきた夜のことでした。

キキは、サーカスを終えて一人波止場を散歩しておりました。波止場の片隅に、痩せたおばあさんが一人座って、シャボン玉を吹いております。

「こんばんは。」

「ああ、こんばんは。ブランコ乗りのキキだね。」

「そうです。今夜の三回宙返りは、見てくれましたか。」

「いいや、見なかったよ。」

「そうですか。惜しいことをしましたね。今夜は、特にうまくいったんです。飛びながら自分でもまるで鳥みたいだっと思ってたくらいなんですからね。」

「みんなもそう言っていたよ……。」

おばあさんは、あいかわらずシャボン玉を吹きながら、遠くカーニバルのテントの建ち並ぶ辺りでついたり消えたりしている赤や青の電氣を見ておりましたが、急にキキの方に振り向いて言いました。

「おまえさんは知っているかね？」

「何をです？」

「今夜、この先の町にかかっている金星サーカスのピピが、三回宙返りをやったよ。」

「④本当ですか。」

「とうとう成功したのさ。みごとに三回宙返りだったそうだよ。」

「そうですか……。」

「その評判を書いた新聞が、今、定期船でこの町へ向かって走っている。明日の朝にはこの町に着いて、みんなに配られる。おまえさんの三回宙返りの人気も、今夜限りさ……。」

「そうですね……。」

「そうだよ。明日の晩の、拍手は、今夜の拍手ほど大きくはないだろうね。」

「でもね、おばあさん。金星サーカスのピピがやったとしても、まだ世界には三回宙返りをやれる人は、二人しかいないんですよ。」

「今までは、おまえさん一人しかできなかったのさ。それが、ピピにもできるようになったんだからね。お客さんは、それじや練習さえすれば、誰にでもできるんじゃないかな、って考え始めるよ。」

キキは黙ってぼんやりと海の方を見ました。しかしまもなく振り返って⑤ぼんのちよつとほほえんでみせると、そのままゆつくり歩き始めました。

「おやすみなさい。おばあさん。」

「お待ち。」

キキは立ち止まりました。

「おまえさんは、明日の晩四回宙返りをやるつもりだね。」

「ええそうです。」

「死ぬよ。」

「いいんです。死んでも。」

「おまえさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいという、ただそれだけのために死ぬのかね。」

「そうです。」

「いいよ。それほどまで考えてるんだったら、おまえさんに四回宙返りをやらせてあげよう。おいで……。」
おばあさんは、かたわらの小さなテントの中に入り、やがて、澄んだ青い水の入った小瓶を持って現れました。

「これを、やる前にお飲み。でも、いいかね。一度しかできないよ。一度やって世界中のどんなブランコ乗りの受けたことのない盛大な拍手をもらって……それで終わりさ。それでもいいなら、おやり。」

*

次の日、その港町では、金星サーカスのピピがついに三回宙返りに成功したという話題でもちきりでした。でも、午後になると、その町の中央広場のまん中に、大きな看板が現れました。

「今夜、キキは、四回宙返りをやります。」

⑥町の人々は、一斉に口をつぐんでしまいました。そしてその看板を見たあと、ピピのことを口にする者は誰もいなくなりました。

夕食が終わると、ほとんど町中の人々がキキのサーカスのテントに集まってきました。

「おい、およしよ。死んでしまうよ。」

ピエロの口がテントの陰で出番を待っているキキに近づいてきてささやきます。

「練習でも、まだ一度も成功していないんだらう？」

陽気な団長さんまでが、心配そうにキキを止めようとします。

「だいじょうぶですよ。きつとうまくゆきます。心配しないでください。」

音楽が高らかに鳴って、キキは白鳥のようにとび出してゆきました。

テントの高い所にあるブランコまで、縄ばしごをするすると登ってゆくと、お客さんにはそれが、天に昇ってゆく白い魂のように見えました。ブランコの上で、キキは、お客さんを見下ろして、ゆっくり右手を上げながら心の中でつぶやきました。

「見てください。四回宙返りは、この一回しかできないのです。」

ブランコが揺れるたびに、キキは、世界全体がゆっくり揺れているように思えました。薬を口の中に入れました。

「あのおばあさんも、このテントのどこかで見ているのかな……。」

キキは、ぼんやり考えました。

しかし、次の瞬間、キキは、大きくブランコを振って、真つ暗な天井の奥へ向かってとび出していました。ひどくゆっくりと、大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。それがむちのようになつて、一回転します。また花が開くように手足が伸びて、抱き抱えるようにつぼんで……二回転。今度は水から跳び上がるお魚のように跳ねて……三回転。お客さんは、はっと息を飲みました。

しかしキキは、やつぱり緩やかに、ひょうのような手足を弾ませると、次のブランコまでたつぷり余裕を残して、四つめの宙返りをしておりました。

人々のどよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。人々

4-

はみんな思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と、肩をたたき合いました。でもそのとき、誰も気づかなかつたのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。お客さんがみんな満足して帰つたあと、がらんとしたテントの中を、団長さんをはじめ、サーカス中の人々が必死になつて探し回つたのですが、無駄でした。

翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに⑦白い大きな鳥が止まっていて、それが悲しそうに鳴きながら、海の方へと飛んでいったといいます。

もしかしたらそれがキキだったのかもしれないと、町の人々はうわさしておりました。

問一 傍線部①とあるが、この言葉からキキに対する団長のどんな気持ちがわかるか。次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 余計な心配をして心を痛めるキキをあわれむ気持ち。

イ キキには人気者でいてもらうために頑張つてほしいという気持ち。

ウ キキに一日も早く、四回宙返りを成功させてほしいという気持ち。

エ 人氣が落ちて悲しむキキを見たくないという気持ち。

問二 傍線部②とあるが、キキはどんなことを「心配」しているのか。簡潔に答えなさい。【思4】

問三 傍線部③について、次の問いに答えなさい。

(1) これまでキキがサーカスでいちばん人気だったのはなぜか。理由を答えなさい。【思3】

(2) キキが、人氣が落ちることでもらえなくなると考えているものは何か。二字で本文中から探して抜き出さない。【思3】

問四 本文中の団長とキキ、ロロとキキのやり取りを踏まえて、内容として適切でないものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア キキは団長から世界一で居続けることを暗に求められており、プレッシャーを感じている。

イ キキは自分の心配を団長がなかなか理解してくれないために、一人で悩みを抱えている。

ウ ロロはキキの命を心配しており、人氣を落とさないために四回宙返りに挑むことを反対している。

エ ロロはキキの人氣をうらやましく思っており、ピエロに誘うことで人氣を落とそうと考えている。

問五 傍線部④とあるが、このときのキキの思いとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 初めて会ったおばあさんの話を信用しておらず、不信感を抱いている。

イ 人々からの、世界一のブランコ乗りへの期待から解放されて心が軽くなっている。

ウ これまで心配していたことが現実となり、すぐには受け止められずにいる。

エ いつか起こることであつたため、しかたがないことだと楽観的に捉えている。

問六 傍線部⑤とあるが、この場面のキキの様子から分かる思いとして適切でないものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 今日の三回宙返りを振り返つた結果、今の自分ならば四回宙返りを成功できると確信したので、明日の晩にやることを決意した。

イ 客からの拍手がもらえなくなることと、人氣を落として生きること比べた結果、死んだとしても四回宙返りをしようと決意した。

ウ 世界でいまだ三回宙返りは二人しかできないが、おばあさんとの話を通して、三回宙返りだけでは人氣を保つのは難しいと理解した。

エ これまでの練習を踏まえると、四回宙返りを成功させるのは困難だと分かっているが、やるしかない

と決意し、死ぬ覚悟を決めた。

問七 傍線部⑥とあるが、町の人々がそうしたのはなぜか。その理由を簡潔に説明しなさい。【思4】

問八 傍線部⑦「白い大きな鳥」とあるが、これは何を表していると考えられるか。本文を踏まえて最も適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 四回宙返りに成功して、お客さんから盛大な拍手をもらえたことを思い出し、自分の最高の演技に満足しているしているキキ。

イ 四回宙返りの成功に満足しながらも、それと引き換えに二度と演技をできないことを切なく思っているキキ。

ウ キキに、命をかけた四回宙返りへの挑戦を選ばせたことを、今になって後悔しているおばあさん。

エ この先、キキと同じように、危険な四回宙返りをする人が次々と現れるのではないかと心配しているサーカスの観客たち。

問九 この物語の場面は、大きく四つに分けられる。本文では空白行（*）で区切られているが、三つに分けられていない。あと一つ空白行を入れて場面を四つに分けるとしたら、どこを分けられるか。場面が新しくなった初めの五字を抜き出さない。【思1】

〔四〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(35)

死んだ父は筆まめな人であった。

私が女学校一年で初めて親元を離れたときも、三日にあげず手紙をよこした。当時保険会社の支店長をしていたが、①一点一画もおろそかにしない大ぶりの筆で、

〔②向田邦子殿〕

と書かれた表書きを初めて見たときは、ひどくびびくりした。父が娘宛ての手紙に「殿」を使うのは当然なのだが、つい四、五日前まで、

「おい邦子！」

と呼び捨てにされ、「ばかやろう！」の罵声やげんこつは日常のことであつたから、突然の変わりように、③こそばゆいような晴れがましいような気分になつたのであろう。

文面も、折りめ正しい時候の挨拶に始まり、新しい東京の社宅の間取りから、庭の植木の種類まで書いてあつた。文中、私を貴女と呼び、

「貴女の学力では難しい漢字もあるが、勉強になるからまめに字引を引くように。」
という訓戒も添えられていた。

ふんどし一つで家中を歩き回り、大酒を飲み、かんしやくを起こして母や子供たちに手を上げる父の姿はどこにもなく、④威厳と愛情にあふれた非の打ちどころのない父親がそこにあつた。

暴君ではあつたが、反面でれ性でもあつた父は、他人行儀という形でしか十三歳の娘に手紙が書けなかつたのであろう。もしかしたら、日頃気恥ずかしくて演じられない父親を、手紙の中でやってみたのかもしれない。

手紙は一日に二通来ることもあり、一学期の別居期間にかなりの数になつた。私は輪ゴムで束ね、しばらく保存していたのだが、いつとはなしにどこかへ行つてしまつた。父は六十四歳で亡くなつたから、この手紙のあと、かれこれ三十年つき合つたことになるが、優しい父の姿を見せたのは、この手紙の中だけである。この手紙も懐かしいが、最も心に残るものと言われれば、父が宛名を書き、妹が「文面」を書いたあの葉書ということになろう。

終戦の年の四月、小学校一年の末の妹が甲府に学童疎開をすることになつた。すでに前の年の秋、同じ小学校に通つていた上の妹は疎開をしていたが、下の妹は余りに幼く⑤不憫だということで、両親が手放さなかつたのである。ところが三月十日の東京大空襲で、家こそ焼け残つたものの命からがらの目に遭い、このまま一家全滅するよりは、と心を決めたらしい。

妹の出發が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になつていたキャラコで肌着を縫つて名札をつけ、父はおびたらしい葉書にきちょうめんな筆で自分宛ての宛名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」
と言つてきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれたかさ高な葉書の束をリュックサックに入れ、雑炊用の井を抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

④一週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱいにはみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添つていった人の話では、地元婦人会が赤飯やばた餅をふるまって歓迎してくださつたとかで、かぼちやの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがひなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなつていった。情けない黒鉛筆の小マルはついにバツに変わった。その頃、少し離れた所に疎開していた上の妹が、下の妹に会いに行った。

下の妹は、校舎の壁に寄り掛かつて梅干しの種をしゃぶつていたが、姉の姿を見ると種をべっと吐き出して泣いたそう。

まもなくバツの葉書も来なくなった。三月めに母が迎えに行ったとき、百日ぜきを患っていた妹は、しらみだらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちやを全部収穫した。小さいのに手をつけると叱る父も、

⑤この日は何も言わなかった。私と弟は、一抱えもある大物からてのひらに載るうらなりまで、二十数個のかぼちやを一列に客間に並べた。これくらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、

「帰ってきたよ！」

と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだしで表へとび出した。防火用水桶の前で、瘦せた妹の肩を抱き、

⑥声をあげて泣いた。私は父が、大人の男が声をたてて泣くのを初めて見た。

あれから三十一年。父は亡くなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のない葉書は、誰がどこにしまったのかそれともなくなったのか、私は一度も見えていない。

問一 傍線部 i-iii の言葉の本文中の意味を、次のア-オの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。【知各1】

i 訓戒 ii 威厳 iii 不憚

ア 礼儀正しい様子。

イ 堂々としておごりやかな様子。

ウ 欠点がないこと。

エ 教えさとし、いましめること。

オ あわれでかわいそうなこと。

問二 傍線部①とあるが、父の筆跡について、本文中の別の箇所には、なんと表現されているか。八字で抜き出さない。【思3】

問三 傍線部②「向田邦子殿」から始まる父からの手紙の内容について、次の問いに答えなさい。

(1) 父が宛名をこのように書いた理由として最も適切なものを、次のア-エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 父は筆まめであり、何度も手紙を書くうちに宛名を書くのにもなれたから。

イ 普段「私」に対して罵声やげんこつを浴びせていたことを反省したから。

ウ 娘宛ての手紙には「殿」を使うという決まりがあり、それに従ったから。

エ 当時の「私」にとって難しい漢字を使うことで、知識をつけてほしかったから。

(2) 「私」は、手紙の中の父をどんな父親だと表現しているか。本文中から二十二字で抜き出さない。【思3】

-9-

問四

傍線部③とあるが、「私」はどう感じていることがわかるか。最も適切なものを、次のア-エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 不気味すぎて訳がわからない。

イ 他人行儀すぎて失礼だ。

ウ 大人扱いされて誇らしい。

エ 突き放された気がして寂しい。

問五 傍線部④とあるが、妹から届いた手紙について、次の問いに答えなさい。

(1) 妹から届いた手紙の「マル」はどのように変化していったか。次の文章内の□内の文字数になるように、本文中から抜き出さない。【思各2】

初めて届いた手紙には ア 十二字 が書いてあった。しかし次の日には小さくなり、イ 十一字 が届いていたものの、ウ 二字 に変わった。最終的には葉書が来なくなった。

(2) 「マル」の変化から、妹のどのような様子がわかるか。簡潔に答えなさい。【思3】

問六 傍線部⑤とあるが、その理由は何だと考えられるか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 戦争によって自分が生きるのに必死になっており、妹のことを考える余裕はなかったから。
イ 帰ってくる妹を喜ばせる方法を、どうにか考えた「私」たちのことを叱りたくなかったから。
ウ 戦争を生き延びる希望を失っており、明日のことを考える余裕はなくなっていたから。
エ 日々「私」たちを叱っていたが、この日だけは、「私」たちを満足させてやろうと考えたから。

問七 傍線部⑥について、次の問いに答えなさい。

(1) このときの父の思いとして適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】
ア 体力が落ち、弱った娘を見て、疎開先での対応の悪さをにくんでいる。
イ 娘が今の状態から回復して、元気になるのか心配している。
ウ 疎開先へ出発する前に、十分な食べ物を持たせてあげればよかったと後悔している。
エ つらい思いをさせ、病気になってしまった娘に対して申し訳ないと思っている。

(2) 父のこの様子を見た「私」の心情として適切なものを次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。【思3】

ア 父は乱暴者だと思っていたが、その内側にある家族への思いを十分に感じた。
イ 父が泣くのを初めて目にし、心の弱さを知ったことで、以後父に優しくしようと思った。
ウ 父が実はまめな人だということが分かり、大人の男として尊敬の念を抱いた。
エ 大人の男が泣くほどに、父が妹への罪悪感を抱いていたことを知り、不憫に思った。

問八 本文のような、「筆者の経験を元にしたことや考えたこと」を書いた文章形態をなんというか。【知2】

☆問題は以上です。時間まで解答の見直しをしてください。